



「7人に1人」の「貧困状態」の高校生にとって、生活費を稼ぐためのダブルワークは当たり前で、毎日兄弟の世話や家事をこなし、「多重債務」を背負う危険もある。そのほとんどは「家族のため」に働いており、決して後ろ向きに生きているのではない。そして、最新ファッション（実は低価格なファストファッション）にスマートフォン（実はライフライン）が、「普通」に見える点でも、同書は注意を促す。

同書は、「見えない貧困」について、困窮度を4段階に分類し、さらには貧困研究の先進地であるイギリスで開発された「剥奪指標」（欠如した権利）を用いて、これを可視化する取り組みを紹介する。その結果、①物的資源に生活に必要な「物」、②ソーシャルキャピタルと人

高校生ワーキングプア 「見えない貧困」の真実

高校生
ワーキングプア
「見えない貧困」の真実

NHKスペシャル取材班 著

1404円 新潮社
☎03-3266-5111

のつながり、③ヒューマンキャピタルに教育や経験の三つの欠如を指摘する。

同書は、定期試験期間中でもシフトを入れてしまいう「ブラックバイト」に対して、「自分がいけないと店がまわらない」と考え、断れない責任感のあるまじめな生徒の例を挙げる。たしかに学習意欲が高い生徒に対しては、解決してやりたい。だが、学習意欲が湧かないまま、定期試験のみに追い回される生徒に対しては、より本質的な支援が必要と評者は考える。彼らが社会に出てから、個人として、社会人として、

充実して生きていくのかどうかこそ重要である。彼らには、試験勉強にあくせくさせることよりも、他者と相互受容できる関係を持ったたり、社会的な広い視野からものを見たり、考えたりできるような力を育むことこそ、本質的な教育目的とすべきではないだろうか。

（前聖徳大学教授・西村美東士）